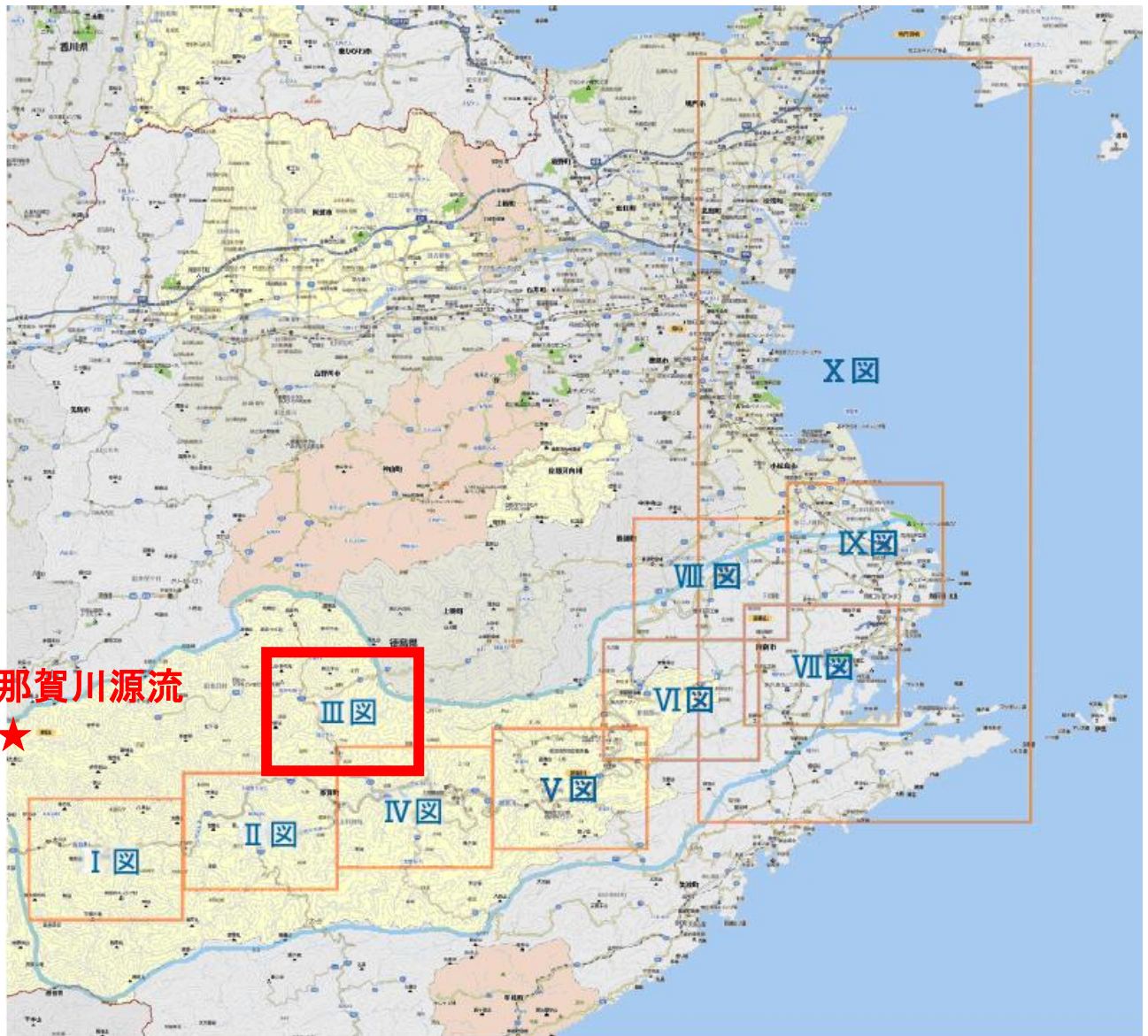


那賀川の風土を巡り訪ねる

第3号



ゆきから那賀川推進会議

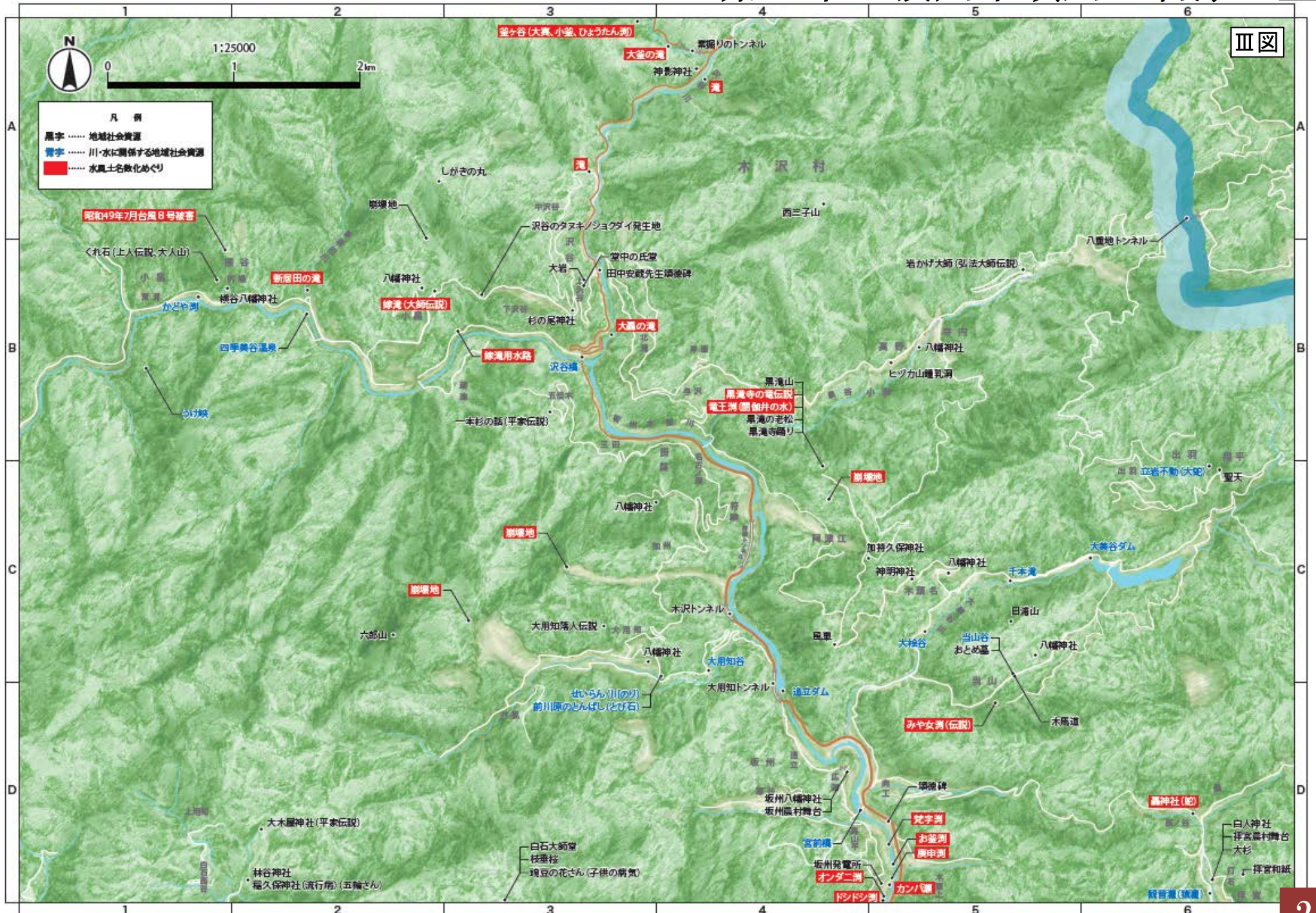


那賀川源流



図番号	タイトル
I 図	那賀川上流と高の瀬峡
II 図	杉とユズの里・木頭
III 図	坂州木頭川と名瀑の里
IV 図	長安ロダムと高磯山の崩壊
V 図	大蛇伝説と瀬淵の物語
VI 図	仁宇谷の歴史と驚敷ライン
VII 図	桑野川流域と津峯山
VIII 図	那賀川・水害の記憶
IX 図	那賀川河口と治水・利水の跡を訪ねる
X 図	徳島の海岸津波の伝説

第3章 坂州木頭川と名瀑の里



坂州木頭川と名瀑の里

◇黒滝寺

Ⅲ図 C4

弘法大師の大竜退治

弘法大師・空海が若いころ、この地で修行していた時、一人の童子が現れて、那賀川上流の黒滝山の辺りに住んでいる大竜を退治せよというお告げを受けました。空海はそのお告げに従って那賀川をさかのぼり、黒滝山の麓の岩の上に座して悪魔退散の祈祷を行うとともに、地蔵菩薩像を刻み、山上に登って大竜降伏の護摩修行を行いました。このため大竜は龍王淵に封じこめられ、二度と人びとを悩ますことがなかったといわれます。その時、空海はここに一字を建て、それが黒滝寺の起りだといわれています。

また、境内には大竜が住んでいたという池跡（山頂湖跡）が残っており、戦国の世に長曾我部氏の大軍に攻められ、僧兵たちが奮戦し、この池が血で染められたことから、別名「血の池」とも呼ばれています。



黒滝寺



黒滝寺の山頂湖跡



大轟の滝

◇大轟の滝

Ⅲ図 B3

三段に流れる静かな滝

木沢支所から国道 193 号を北へ 5.5km ほど行った釜ヶ谷溪谷入り口の対岸に見える滝です。落差 8 m あまりで、白い石灰岩を三段に流れ、広くて深い淵に落ちています。「大轟」という名前とは対照的に静かな佇まいの滝です。

◇みや女溺

Ⅲ図 D5

少女みやの死と母親の怨讐

むかし、木頭名寺野に寺井という家がありました。ある年の冬の宵、この家の軒先に母娘連れに巡礼がいました。娘の名はおみやといいました。巡礼の粗末な身なりでは、寒さを凌ぐのは無理だったので、一通りの念仏をおえてから一夜の宿を乞うと、あるじは心よく承知しその夜はそこで泊まることになりました。一夜の宿は二夜となり、三夜と続き、瞬く間に十日余りの日が過ぎました。

ある日のこと、家中そろって山仕事に行くことになり、長い逗留の恩返しにとみやの母も共に仕事に行き、みやが留守をすることになりました。昼がすぎて太陽は西に傾き、静かであった天気からやがて風がでてきました。みやは夕食の準備や足の湯などの準備のため、カマドに火をたきました。夕食の準備もできたのに母達が帰りません。ほんの少しの間でしたが待ちきれず外にでて待ってから、かまどの火はと家の中へ入って見ると、家の中は火の海でした。数刻の時が流れ、焼け跡にみや母娘とそのかたわらに怒りと失望にうちひしがれたあるじの姿がありました。

一瞬にして家を失ったあるじの心中はどうだったのでしょうか、母娘は必死になってわびたが許されませんでした。

数日後、あるじは嫌がるみやをひきずって溺へ向かいました。またも母は必死に詫びたが許してくれません。千本滝の上を回るとき、門の前の畠に立つ母をみたみやは、必死に道ばたの竹にすがって抵抗しましたが、竹はみやの手に握られたまま約二キロの道をひきずられ、みやの手からでた血で真っ赤になりました。溺に着いたときは、みやは半死半生でした。数分後、夕闇せまる谷川に「ザブン」と、おみやの身投げの音か、投げ込まれた音かわからない音がしました。そのとき夕闇迫る谷の水面から一条の火の玉が天空に走りましました。

おみやの母はその日、自らの指をかみ切つてわが血を吸い、天に向かって「七代の末まで崇めてこの家を絶やしてやる」と真紅の血しぶきを吹き上げそのまま姿をけしました。

その後、この溺を「みや女溺」と名付けましたが、数々の人が水死したり異変がありました。これはみやの祟りでないかと、木頭名、当山、阿津江の三部落の人が相談して、みや女溺の岩の上に不動明をおまつりしました。

【那賀川コラム】

沢谷のタヌキノシクダイ発生地

Ⅲ図 B3

温帯地に自生する例は極めて稀な腐生植物

腐植土中に生ずる熱帯性の腐生植物で、七月下旬から八月中旬ごろに花が開きます。ロウソクをともし燭台に似た奇妙な形をしていることから、その名が付いたといわれています。温帯地に自生する例はきわめて珍しく、国の天然記念物に指定されています。



タヌキノシクダイ(写真提供:平井滋氏)

◇昭和 49 年台風 8 号被害 Ⅲ図 B1

楕円形状に降らせた異常な集中豪雨

昭和四十九年七月六日の台風 8 号は、風の強さでは並以下の規模でしたが、午後 2 時ごろから同 7 時ごろまで高城山を中心に、北は神山町から南は木頭村蟬谷にかけて、楕円形状に降らせた集中豪雨は異常なものでした。活発な梅雨前線を刺激したためといわれますが、本村でも釜ヶ谷、沢谷、小畠、横谷、楳谷、大用知の地域にかつてない被害をもたらしました。

川成以西と坂州以东では、嘘のような雨で役場の雨量計も一日 370mm を記録したにすぎません。横谷地方での午後 3 時ごろから夕刻にかけての雨は、目の前が白い滝となって 10m 先が見えなかったそうで、時間雨量も 100mm 以下ではなかったろうと想像します。

被害は、県道木沢上那賀線の出合（沢谷）楳谷間で、40 カ所をこえる崩壊、埋没が発生し、ことに、楳谷橋西詰の道路は 30m にわたって欠壊し、そこが本流となりました。そこにあった住家二戸は瞬時にして流失、家人は逃げるのが精一杯であったといえます。

また、普段水のない横谷や井奥谷の氾濫も驚くばかりで、井奥谷では五十年生の杉の大木が、立ったまま流れたといわれます。

山肌の平地に点在する小畠部落では、あちこちから噴き出したやましおと呼ばれる水のため、一時隣家への往来もできなかつたほどです。



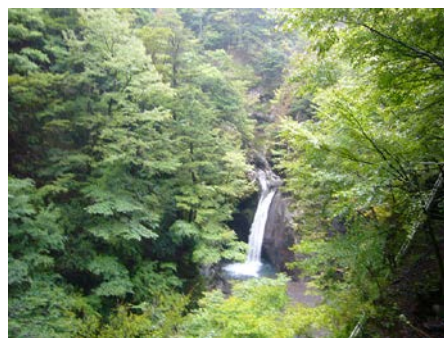
楳谷口県道の欠壊（昭和 49 年 7 月）

◇大釜の滝 Ⅲ図 A4

大蛇が住むといわれた名瀑

釜ヶ谷溪谷最大の見どころの滝です。「日本の滝百選」に数えられるこの滝は直下型で、落差 10m あまり。約 15m もの深さがあるという大きな滝壺（お釜）があり、大蛇が棲むと言われ、魚釣りは禁じられていました。周囲には広葉樹が多く、名滝に相応しい雰囲気醸し出しています。

滝の下流は「釜ヶ谷溪谷」と呼ばれる断崖で、高さ 50m 以上ある岸壁が屏風のように両側に切り立って、幅 20m ほどの溪谷をつくっています。昭和 42 年に公団の林道が出来るまでは、人を寄せつけないほどの難所でした。



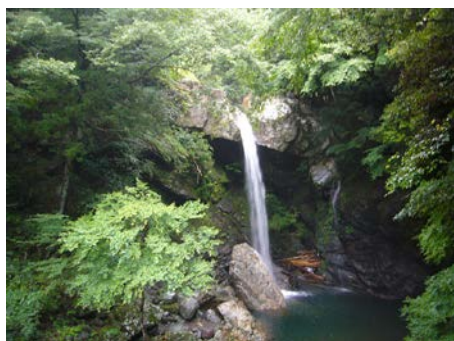
大釜の滝

◇新居田の滝

Ⅲ図 B2

オーバーバンクして落ちる優美な滝

直下型で落差 12m あまり、オーバーバンクして落ちる優美な滝です。滝の正面の旧道は橋の付け替えによりきれいな歩道として生まれ変わっており、ここから正面に見る姿が美しい滝です。その昔、古狸が住みついて通行人をよく騙したとの言い伝えがあります。



新居田の滝

【那賀川コラム】

千本滝の伝説

Ⅲ図 C5

滝つぼに沈む千本の材木

この滝の上方の出羽には、藩政時代蜂須賀の御料林がありました。あるとき、その材木千本を切って出水を待って流しました。ところが千本ともことごとく滝壺に沈んでしまいました。役人達は困ったあげく、神主を呼んで来て滝の上のだんじり岩に御神酒などをお供えし、お祈りをしたところ、材木がやっと浮き上がってきて、那賀川へ流れて行ったといいます。また、この滝壺が海部郡の轟の滝壺に続いているとか、蛇の主がいると伝えられています。

◇嫁滝の伝説

Ⅲ図 B2

弘法大師ゆかりの湧水

小島集落の中心から約 300m 東方、農道沿いの崖に「嫁滝」と呼ばれる小さな滝があります。言い伝えによると、昔、長い間日照りが続き、集落の人たちは飲料水や炊事洗濯に困り果てていました。ある日、若い嫁さんが途方にくれて、道端で泣いているところへ、弘法大師が通りかかり、理由をきいて「気の毒なことだ、私が水を出してあげよう」と、持っていた杖で岩の間を突付くと、たちまち水が湧き出したといいます。それ以来、この水は枯れることなく、岩の割れ目からこんこんと湧き、冬はぬるく夏は冷たく、部落の人達の飲料水、洗濯、水車等に利用されてきました。

集落の人たちは、この滝を「嫁滝」と呼び、地名も「字嫁ヶ滝」となっています（現在は水が枯れています）。



嫁滝周辺

ゆきかう那賀川推進会議事務局

国土交通省 四国地方整備局

那賀川河川事務所

徳島県 県土整備部

阿南市

那賀町